
高校生、大学生の論理的文章における語彙運用上の課題

—— 意見を述べる文章を対象として ——

永田 里美 田中 佑

安部 朋世 橋本 修 矢澤 真人

abstract

本研究は論理的文章を書く際の学習支援を視野に据え、作文における言語事項の課題を整理しようとするものである。本稿では、その初期調査として、論理的文章のなかでも、意見を述べる文章を対象に、高校生、大学生の語彙運用上の課題について小論文の解答例と比較しつつ、調査および考察を行った。本稿では、その分析にあたり3つの観点1) 文末表現、2) 文末以外の語彙、3) 「論証に必要な語句」に着目し、その結果、いずれの観点においても高校生、大学生の文章からは語彙の不足がうかがえることを指摘した。その中で1)、2) においては選択する語句と段落関係における吟味の浅さや類似する他のバリエーションの豊富さに欠けることを課題として指摘した。3) では論理的文章を書くための語彙を抽出するにあたってその作業方法の有効性、妥当性を示した。各分析の観点における要点は以下の通りである。

- 1) 高校生、大学生の文章は小論文の解答例に比べて客観的な事実から帰結を導く語句のバリエーションが少なく、「思ウ」、「考エル」の使用が目立ち、かつ段落相互の関係性が吟味されているとはいえない状況にある。
- 2) 高校生、大学生において、広義条件表現におけるタラの使用、「場合」と「ケース」の併用の少なさ、「意味する」等の派生語の不使用等、気づかれにくい非習熟的な語彙の分布が見られる。
- 3) 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編が挙げる「論証に必要な語句」（接続語句を除く）は、小論文の解答例30テーマ51本でもそれほど使用されておらず、テーマをまたいで一定数以上の使用が見られたのは「論証」の1語だけである。

これらの分析と考察によって今後の語彙指導の方向性や語彙リスト作成の有効性を示すことができた。

キーワード

語彙指導、作文支援、論理的文章、文章の習熟度

1. はじめに

平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領（以下、新指導要領）は、中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）での指摘、「話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていない^(注1)」を受け、大幅な科目編成がなされるとともに、書く資質・能力の形成が図られている。特に論理的な文章については、近年、大学の初年次教育において論文やレポートなどの書き方に関する講義が行われている状況^(注2)をふまえ、「現代の国語」や「論理国語」を中心に「書くこと」の指導の充実が図られている。また、新指導要領では学習内容の改善事項の 1 つに「語彙指導の改善と充実」が挙げられており^(注3)、中でも上述の「論理国語」においては「論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句」の学習が指導事項として挙げられ^(注4)大学への接続を意識した内容が示されている。

他方、大学の初年次教育における「書くこと」については、これまでに島田（2012）、渡辺・島田（2017）等によって大学生の文章作成における諸課題が指摘されており、高等学校教育との連携、接続の必要性が論じられている。諸課題のうち語彙に関する事例もその一つであり、川端（2013）や酒井・関（2020）等によって語彙不足、適切さの欠如等が指摘されている。

語彙運用上の課題に関しては、中等教育課程においても山下（2011）等によって指摘されてきた^(注5)が、上記の指導要領が示すように、語彙指導については未だ不十分な状況であると言わざるを得ない。

最近では新指導要領を受けて松崎（2018）によって初等教育課程における「論理」「思考」に関わる語句の選定が試みられているが、中等教育段階については今後の考察を俟つ状況にある。

こうした背景のもと、本研究は論理的な文章を書く際の学習支援を視野に据え、作文における言語事項の課題を整理しようとするものである。本稿では、その初期調査として、論理的文章^(注6)のなかでも、意見を述べる文章を対象として、高校生、大学生の語彙運用上の課題について小論文の解答例と比較しつつ、調査および考察を行う。なお、本稿で対象とする「意見を述べる文章」とは、理由や事例を明確にしなが、筋道を立てて自分の考えを述べたもの^(注7)で、自己の経験や知見に基づいた具体例を根拠として示すことによって説得力の増大を図るものとし、かつ、それを書くにあたり、資料等の調査期間を経ないものとする。意見を述べる文章を対象にするのは、高校生が進学や就職に際して書く機会が多いと考えられるためである。また小論文を比較対象とするのは、その位置づけが「入試で課される意見文（渡辺・島田 2017、p.53）」とみなされることに依る。

本研究を進めることによって、論理的な文章を書く際の、語彙の質を高める指導の方向性や、「論証に必要な語句」の選定方策が期待されることとなる。

2. 調査対象および調査の観点

2.1 調査対象

調査対象とするのは以下のコーパスである。文章数等は表 1 として示す。

- <高校生^(注8)>：歴史を学ぶ意義について600字程度で意見を述べた文章51本。
 <大学生^(注9)>：制服の着崩しについて新聞記事を読み、800～1000字程度で意見を述べた文章98本。
 <解答例^(注10)>：入試問題として出題された小論文30題(600～1000字程度)で意見を述べた文章51本。

表1 本稿で用いるコーパスの文章数等

	文章数	総文数	平均文数	総文字数 (句読点含む)	一文当たりの 平均文字数
高校生	51	763	15.0	32215	42.2
大学生	98	1908	19.5	89772	47.1
解答例	51	823	16.1	46157	56.1

2.2 調査の観点

本稿では各コーパスについて1)文末表現、2)文末以外の語彙(ケーススタディ)、3)「論証に必要な語句」に着目し、調査を行った。

3. 結果と分析

3.1 文末表現について

<高校生><大学生><解答例>において「思考・判断」に関わる文末表現として群をなすものを抽出し、まとめた結果が以下の表2～4である^(注11)。

表2 <高校生>に見られる文末表現上位

	高校生 文末表現の例	用例数
1	思ウ。	88
2	考エル。	50
3	ノダ。	37
4	ダロウ。	26
5	トイウコトダ。	14
6	(ノ)デハナイダロウカ。	9
7	カモシレナイ。	8
8	言エル。	5
〃	思ッタ。	5
〃	ハズダ。	5
〃	ワカル。	5

表3 <大学生>に見られる文末表現上位

	大学生 文末表現の例	用例数
1	考エル。	199
2	思ウ。	162
3	ノダ。	87
4	ダロウ。	78
5	考エラレル。	32
6	トイウコトダ。	31
7	(ノ) デハナイダロウカ。	28
8	(ノ) デハナイカ。	27
9	カモシレナイ。	20
10	言エル。	12
〃	ニナル。	12

表4 <解答例>に見られる文末表現上位

	解答例 文末表現の例	用例数
1	ノダ。	66
2	ダロウ。	58
3	考エル。	31
4	ニナル。	18
5	トイウコトダ。	11
〃	(ノ) デハナイダロウカ。	11
6	考エラレル。	9
〃	ハズダ。	9
7	言エル。	7
〃	(ノ) デハナイカ。	7

これらの表から次の2点が指摘できる。

- ・ <高校生><大学生>の文末表現は「思ウ」「考エル」の使用が目立つ。<大学生>では「考エル」の使用が「思ウ」に比して多くなる。他方、<解答例>の文末表現に「思ウ」は上位語句として現れない。
- ・ <解答例>では「考エル」の他、「ニナル」「考エラレル」「言エル」等、客観的な事実から帰結を導く語句のバリエーションが見られる。この傾向は<大学生>にも若干、認められる。

そこで、<高校生><大学生>で使用が目立った「思ウ」「考エル」の用いられ方について、出現位置に着目して考察を行ったものが以下である。

最初に、調査対象である3コーパスに共通して現れる文末表現「考エル」の出現位置についてみていきたい。以下の表5は冒頭段落のみ、最終段落のみ、冒頭・最終段落の双方(双段落と記す)、特に規則がみとめられないものをその他としてまとめたものである^(注12)。

表5 「考エル」の出現位置

文章数	冒頭段落	最終段落	双段落	その他
解答例 24 本	5 (20%)	13 (54%)	3 (13%)	3 (13%)
高校生 24 本	2 (8%)	5 (21%)	7 (29%)	10 (42%)
大学生 69 本	6 (9%)	10 (14%)	8 (12%)	45 (65%)

ここから以下のことが指摘できる。

- ・ <解答例>では「考エル」が最終段落に現れる傾向にある。いわゆる尾括型の帰結部分としての機能を「考エル」が担う傾向にあると言える。
- ・ <高校生><大学生>においても型を意識した「考エル」の使用が見て取れるものの、割合としては「その他」に属するものが最も多く、特に<大学生>になると規則性が著しく希薄になる。

最初に<高校生>の作文例を示す。(■、□は本稿筆者が補った。以下同様)。冒頭段落と最終段落に「考エル」を使用した双括型への構成意識が読み取れる。冒頭段落で「私は～考エル」、最終段落で「以上より～考エル」の型を踏むものが多い。

私は歴史を学ぶことによって未来を築く上で必要な判断材料を増やし、よりよい方向へ未来を導くことができるからと考える。

なぜなら、歴史の中には様々な人々の考えや政治、宗教の変遷があるからである。歴史と聞くと人々は偉人であったり、聖人であったり、いろいろな輝かしい成功をした人物などを思い浮かべるかもしれない。しかし、そんな偉人・聖人の中にも数多くの誤ちを犯した者もいるのである。

例えば、戦争の歴史という観点でそれを見ていくと、第二次世界大戦の開戦というのが日本の歴史上最大の誤ちであったと言われていた。枢軸国側として当時のドイツ、イタリアなどといったファシズム国家との共闘は現在から見ると、無謀であったとしか言いようがない。しかしながら、当時の日本ではそれが現状を打破する最善の選択肢であったと考えられており、後に日本を一時的ではあるが破滅に追い込むことになるその決断を疑う者はごく少数を除いて誰もいなかったのである。

このような例からわかるように、歴史の中には人類が犯してきた失敗が数多く存在する。しかし、そこには当時の人々と現代人の考え方のギャップがあり、私達から見れば誤ちであっても、当時の人々から見れば最善の択であったということは往々にしてある。だからこそ私達は人類の失敗をきちんと「失敗」として再認識するために歴史を振り返り続けるということが必要なのである。

以上より、私は未来を創造していく上で人類が大きな失敗を出来る限り起こさないように歴史を学んでいく必要があると考える。(高校生 44A)

一方、次の作文例のように、冒頭段落と最終段落に「考エル」を使用するものの、第二段

落にも「考エル」が使用されており、規則性が読み取れないものもある。

私は歴史を学ぶ意義は二つあると「考える」。

一つ目は、人類の歴史を辿り、自分の今いる位置を確認するためである。人類がいかに進化し、どのような歴史を築いてきたかを知ることで、自分の今いる環境がどのようにできたのかを知ることが可能だ。またその環境によって、自分の価値観がどのようにできたのかも知ることが可能である。したがって、歴史を学ぶことによって、自分の存在をより強く確められるようになる私は「考える」。

二つ目は、歴史で繰り返された人類の過ちを再び繰り返すのを防ぐためである。歴史上の過ちだとされる出来事が形を変えて、現代の私達にも迫りくる問題となる可能性は大いにある。その問題と向き合うことになった時に、歴史を知っているか、知っていないかが大きな違いを生むのは明白だ。もし、同じような出来事を歴史上で知っていたとすれば、同じ間違いを繰り返さないように歴史上と異なる対応策を出すことが可能である。たとえその対応策が上手くいかなかったとしても歴史上の過ちとは違う結果にすることができる。そして、歴史上の過ちとなったとしても、次の代への反面教師としての例を新たに増やすことが可能だ。しかし、歴史を学ばず、知らなかった場合は、歴史上の過ちを繰り返す可能性が高くなる。そして、次の世代へよりよい生活にするための例も残すことができない。したがって、歴史を学ぶことで、過去の過ちを繰り返さない、もしくは次の世代へと自分達の過ちを例として伝えることができる。

以上の2つを私は歴史を学ぶ意義であると「考える」。(高校生2A)

次に示すのは<大学生>の作文例である。全ての段落で「考エル」を用いており、程度の差はあれ、大学生の作文には複数段落にわたって「考エル」が用いられる傾向にある。全体として<大学生>作文には「考エル」の多用が目立つ。

私は、制服はきちんと着るべきであると「考える」。昔と比べると現在は、そこまで着崩しせず、ゆるさが流行っていることが参考資料から読み取れる。ゆるさを見せるということは、言い換えれば制服をオシャレに着こなすということと少し似ていると私は「考える」。中学生は、思春期を迎える子もいて、制服をきっちり着ることに反抗して、他人からかっこよく見られるように着崩したりする。高校生は、少し服に興味を持ち始める子もいて、制服をきっちり着るよりは、シャツならば第2ボタンまであけて、ズボンならば大体な腰パンをするのではなく、軽く腰パンをすることでゆるく見せ、他人からオシャレに見られようとする。中高生にはいろいろな考えや時期がある。しかし、何でも許されるというわけではない。制服をきっちり着るという規則があればその規則を守り、制服でかっこよく見せたり、オシャレに見せたりするのではなく私服でかっこよく見せたりオシャレに見せたりするべきであると私は「考える」。

参考資料において、小寺校長は、「服装の乱れ＝非行とは言えないが、非行を発見する手立てになる」や「中学生は、規範意識を養う時期」とおっしゃっている。私も同じ意見である。普段からだらしない格好をしていたり生活をしている人は、面接や重要な時にボロが出てしまう人が多いと「思う」。中学生のみならず高校生も社会に出た時に向けてしっかりと規範を守らなければならない時期であると「考える」。

制服をしっかりと着こなすということは、決して難しいことではない。むしろ簡単である。社会に出ればいろいろと細かい規則を守らなければならない。中高生は、社会に出た時に困らないように小さな規則かもしれないがそういった規則を守ることによって成長してゆくと考えるので、まずは服装からきちんとしてゆくべきである。また教育面から考えても、社会に出て立派に生きることができる生徒に育てるように教員も生徒に厳しく規則を守らせることが良いことだと私は「考える」。(大学生71)

続いて、「思う」について出現位置をまとめたものが以下の表6である。

表6 「思う」の出現位置

文章数	冒頭段落	最終段落	双段落	その他
解答例 3 本	1 (33%)	0	0	2 (67%)
高校生 22 本	2 (9%)	3 (14%)	1 (4%)	16 (73%)
大学生 46 本	5 (11%)	4 (4%)	3 (7%)	36 (78%)

表6から「思う」は複数段落にわたって使用される傾向にあり、特段の規則性は見出されないことがわかる。例えば「思う」は次のように、＜高校生＞＜大学生＞ともに複数段落にわたって使用されている。

私が、高校生の時にも制服の着崩しについて指導してくる教員もいれば、そうではない教員もいた。そのため先生がいるときにはしっかりとした服装をし、登下校になると制服を着崩す生徒は多くいた。参考資料にも書いてあるように非行が反抗という意味で行っているものではなく、ダサく見られたくない、着崩している方がかっこいいからと考える生徒が多くいるからであると思ふ。

私自身がこれから教師になって、このようなことを指導する立場になったら、しっかりと指導していかなければならないと思う反面、どうして制服の着崩しをしてはいけないのかと思う時もある。頭髮にせよ、制服の着かたにせよ、やっている本人は自分を良く見せたいと思ってやっていることであるのでそれを教員側が否定するのはどうかと思う時もある。そもそも中学生・高校生は思春期の時期でもあり、他人よりも良く見せたい時期でもある。そのため、制服を着崩したいと思う気持ちも自分自身も経験してきたためあまり否定はできない。大学生になるとそのようなことは、逆にダサイことでもあるなと思う反面、中学生・高校生だったからできたことであると思ふ。

指導している教員側は、何をもって乱れとしているのか、またどうして制服の着崩れについてそこまで問題視しているのか。制服の着崩れをしているからといってその生徒が、悪い生徒であるとは言い切れないし、中には勉強に対してまじめな生徒さえもいる。制服の着崩れはしているかも知れないが、日常生活はきちんとしている生徒はどうか。そのようなところは指導する側からすれば難しいことであると思ふ。制服の着崩しは日常生活の乱れととらえることは、私は違うと思ふ。確かに制服の着崩れは、社会的に見たらあまりよくないことではあると思うけれども、私自身は、大人になれば、そのようなことにも自分自身で気づくことができると思うので、今やりたいと思っていることは、他人に迷惑をかけない範囲ならば、許しても良いと思ふ。このように言えるのは、自分自身も今という時間を楽しんできたから言えることだと思ふ。(大学生 59)

これらは、先に挙げた大学生の文章において「考エル」が複数段落にわたって使用される分布のあり方に類似している。また、「考エル」「思う」を随所に用いる例も見られる。ここに使用される「考エル」と「思う」との間に質的な差異はみとめられない。

まずはじめにこの資料を読んで思ったのが、流行が少し真面目な方に傾き、また人々が空気を読みたがり、他人や周囲から浮くことを恐れていると思った。自分のイメージでは少し前ま

でドラマや映画でもけんかが強かったり、煙草やお酒がかっこいい風潮があったため、校則からはずれ、悪く見せるのが流行ったのだと自分は考えた。それからしばらくして、ジャニーズやカッコいい俳優や女優が演じる真面目な役やドラマ、映画がはやり、学生が真似しはじめたと「考える」。バブルが終わり、就職が少し難しくなったころ、親も心配し始め、子どもを良い学校に行かせたいと感じはじめ、その要望を聞きとり、学校側も制服検査を厳しくし始め、しかし、学生はきっちりしすぎるのはダサイと感じたため、今の「ゆるめる」がはやったのではと自分は思った。そして、自分たちと違う人を珍しがったり、変な風に扱いはじめ、陰口を言うようになった。ネット社会も進歩し、面と向き合わなくても陰口が伝わるようになり、みんなと合わせるようになったと「考える」。

自分はこの「ちょいゆるめ」はいい流行なのではと「考える」。前の頃とは異なり、大げさに校則を違反しているわけでもなく、個性が出ていて真面目さも前より良くなっているので、このまま流行が進めば、完全に校則を破らなくなるのではと「思う」。しかしそのためにはやはりメディアの影響が必須であり、学園ドラマや映画、雑誌などの際に校則違反をしていない生徒をどれだけ良く見せることが大事だと自分は「考える」。その影響で流行はさらに真面目になるのではと「考える」。着崩し以外でも勉強やスポーツにおいても同じように述べることができると「思う」。一つの目的のために努力する姿や真面目な姿は人々を引きつけ、感動させる。刺激の多いドラマや映画よりも最近では感動し、涙を誘うドラマや映画の方が増えていると自分は「思う」。その流行も着崩しに影響していると自分は「考える」。感動することや真面目になること、涙を流すことや努力することは良いことだと思うのでこの流行は日本の特徴であり、自分は良いことだと「考える」。(大学生 72)

こうした「思う」「考エル」の使用状況について、推測されるのは「思う」の運用がそのまま「考エル」に移行する傾向にあるのではないかということである。要因としては初年次教育において論文やレポートの書き方に関する講義を受講したり、学術的な論文にふれることが多くなったりすることが考えられる。ただし、その運用の仕方には課題があると言わざるを得ない。次の〈大学生〉の作文においては、「個人的に感じることは～に考エル」(傍線部は本稿筆者による)のように、「考エル」の語法として不自然な用例も見られる。ここは「思う」を使用する方が自然である。

「制服の着崩し」について、20年前と今と比較してみると個人的に感じることは、20年前より奇抜ではなくなったように「考える」。(中略) (大学生 27)

以上のことから、次のことが指摘できる。

- ・〈高校生〉〈大学生〉においては、全体的に文末表現のバリエーションが少ない。
- ・〈大学生〉になると「考エル」の使用率が上がるものの、段落との関連性は浅い例が多くなる。「思う」の単なる置き換えと読み取れるものが多い。

川端 (2013, p.79) は伝達的機能として「思う」が「主体が能動的かどうかに関わらず、頭に思い浮かべることやイメージすることなど事態の把握そのものであり、それに対する心のあり方や状態」を示すのに対し「考エル」は「結論や状態が不明なものを見つけるための行為(作業)」を示すとする。この機能を踏まえた場合、どの段落で「思う」「考エル」を使用するのが適切であるかが吟味されねばならないであろう。また、考察に関わる語句や妥当性を表す語句への言い換えが検討されることも必要であろう^(註13)。しかし、今回の

調査においては、「思う」「考エル」の質的差異が見出されないだけでなく、段落相互の関係性が十分に考慮されているとはいえない文章例が数多く見出された^(註14)。島田(2012)、渡辺・島田(2017)は大学生における段落意識の希薄さを指摘しており、本調査における「考エル」「思う」の出現傾向はその一端が現れているものと考えられる。

3.2 文末以外の語彙について

文末以外の語彙使用についても、<高校生><大学生><解答例>の間には差が見られる。高校生以上の学齢になると、多くの場合、明確に誤り・不自然というものを特定の指摘できる訳ではないが、分布全体としてみれば、十分に習熟した社会人(ここでは解答例)とは異なる、気づかれにくい非習熟が見いだされる。

3.2.1 広義条件表現

論理的な文章構成のなかで重要な位置を占める、条件表現についても、作文間での習熟度の差が具体的な数字として現れる。今回調査では、接続助詞「たら」の使用、「場合／ケース」の併用に差が見られた。

まず、接続助詞「たら」の使用について見てみる。接続助詞「たら」は条件文を構成する際の、いわば普通の語として捉えられることが多く、辞書類を見ても口語性が強調される(書き言葉として不適とされる)記述が少ないが、実際には下記の表7のような分布の差が見られる。

表7

	「たら」使用数	100文あたり「たら」出現頻度
解答例	2	0.24
高校生	55	2.88
大学生	14	1.83

上記表7から分かるように、まず単純な頻度として、<解答例>において「たら」の出現頻度が非常に低い。また、僅かに現れた2例についても、2例とも下記のように「Vとしたら」という形で現れ、「たら」の典型例である「Vたら」という形では1例も現れていないことが確認できる。

- ・もしそうした人々がいたとしたら、それはかくれんぼうが既にスポーツの一種目になっていることを意味する。そんなストローが広まったとしたら、
- ・それを使うことで「個人の利益」も「全体の利益」も増大し、しかも「企業の利益」にもなるはずだ。

このように、<解答例>では条件表現を接続助詞「たら」の典型用法は、ほぼ避けられているが<高校生><大学生>においてはそうではない、ということが分かる。「たら」が一

目で稚拙であると感じさせる語彙ではないものの、全体的な習熟・洗練という意味では問題になってくる語彙であるということになる。

また、条件表現の一部をなす名詞「場合」「ケース」についても気づかれにくい分布上の特徴がある。

表 8

	「場合」	100 文あたり 「場合」出現頻度	「ケース」	100 文あたり 「ケース」 出現頻度
解答例	19	2.31	7	0.85
高校生	37	1.94	0	0
大学生	7	0.92	0	0

上記表 8 を見ると、＜高校生＞＜大学生＞において、「ケース」という語彙が用いられていない一方、＜解答例＞ではそれなりに（「場合」の 1/3 強の頻度で）用いられていることが分かる。こちらのケースにおいては、＜解答例＞において「場合」も多く用いられていることから分かるように、「場合」という名詞の使用が非習熟・非洗練に直接結びつくわけではない。しかし、近似の意味・機能を持つ語彙について、異なる語形を適当な位置で併用する、ということが上記の表の分布から見て取れる。「場合」という名詞と「ケース」という名詞は常に置き換え可能というわけではないのでさらなる精査も必要であるが、現時点で単純化して言えば＜高校生＞＜大学生＞における「ケース」の不使用が問題になるということである。このように、文章の習熟・洗練という観点からは特定の語彙の不使用に注意を向けなければならない、どのような語彙に注意を向ける必要があるのかについて今後検討を進める予定である。

3.2.2 品詞のバリエーション

習熟のための語彙習得のプロセスとして、品詞等における語彙拡張が取り上げられることがある。この点についても、＜高校生＞＜大学生＞と＜解答例＞では差が見られることがある。

表 9

	「意味」	100 文あたり 「意味」出現頻度	「意味する」	100 文あたり 「意味する」 出現頻度
解答例	19	2.30	7	0.85
高校生	39	2.04	1	0.05
大学生	8	0.53	0	0

上記のように、名詞「意味」は<解答例><大学生><高校生>いずれも使用例が普通にあるが、動詞「意味する」の使用頻度は、<高校生><大学生>と<解答例>との間に大きな差がつく。書き言葉、特に論理的的文章における語彙の習熟、語彙拡張の発達という点から、このような注意すべき語彙を抽出することが今後の課題になってくる。

3.2.3 気づかれにくい非習熟現象

以上のように、文末表現以外においても、<解答例>と<高校生><大学生>の間には語彙の分布に明確な差が現れ、これらの違いが、全体としての文章の習熟度・洗練度の差として現れていると考えられる。これらの差は特定の箇所をピンポイントで指摘し修正することが難しい、気づかれにくい差異である。このような、気づかれにくい全体としては影響を持つ語彙を指導の際に利用しやすい形で抽出・整理することが、今後重要になっていくと考える。

3.3 「論証に必要な語句」について

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編（以下、解説）「第3節 論理国語」[3 内容]イには、「論証に必要な語句」（その過程を明確にしながら述べるために用いられる語句）として次の14語が挙げられている。

- ・ 接続語句：「ゆえに」、「すなわち」、「ただし」、「および」、「かつ」など
- ・ 思考の過程や判断を表す語句：「妥当」、「示唆（される）」、「矛盾（しない）」など（以下、「思考・判断語句」）
- ・ 論証の形式や方法に関する語句：「仮説」、「検証」、「定義」、「根拠」、「論拠」、「参照」など（以下、「論証語句」）

上記14語の<高校生><大学生><解答例>における頻度を表10に示す。

表10 「論証に必要な語句」の3コーパスにおける頻度

語句		解答例	大学生	高校生
接続 語句 ※漢字 表記 含む	ゆえに	4	4	1
	すなわち	17	1	4
	ただし	5	3	1
	および	4		1
	かつ	5	5	7
思考・ 判断 語句	妥当	2		
	示唆	2	1	1
	矛盾	1	3	
論証 語句	仮説			
	検証	7		
	定義	1	2	
	根拠	7	5	
	論拠			
	参照			

ここから以下の2点が指摘できる。

- ・ 接続語句は<高校生><大学生>にも見られるが、頻度は高くない。
- ・ 思考・判断語句、論証語句は<高校生>にはほとんど見られないが、<大学生>でも多くはなく、<解答例>でもそれほど使用されていない。

接続語句に関しては表現辞典(沖森 2016 など)が存在するが、思考・判断語句、論証語句に関しては、他にどのような語が含まれ得るか、という点から検討していく必要がある。

そこで、次に、3 コーパスにおける漢字二字から成る語の出現状況について調査した。漢字二字から成る語に焦点を当てたのは、解説に示された語がすべて二字漢語であったためである。調査の手順を以下に示す。

- ・ <解答例>において複数の話題に出現している語を抽出 (51 本に対し、30 題)。
- ・ 5つ以上のテーマに出現していた語 138 語を「解答例作成者が高校生に使用を期待する、テーマを問わずに使用される語彙」に認定。
- ・ 138 語の中で思考・判断語句、論証語句に該当すると思われる語を選定。

まず、上記の手順で抽出された 138 語を話題頻度順に示す。

話題頻度 13 以上: 社会 (23)、必要 (21)、問題 (18)、人間 (16)、意味 (16)、関係 (15)、日本 (15)、存在 (15)、以上 (14)、状況 (13)、

話題頻度 12: 価値、生活、自己、重要、可能、一方

話題頻度 11: 主義、教育、自分、世界、一人、場合、能力

話題頻度 10: 多様、地域、他者、人々、実現、高齢、実際

話題頻度 9: 情報、役割、学校、目的

話題頻度 8: 個人、大切、共通、全体、判断、経験、身体、現在、第一、特定

話題頻度 7: 自由、文化、利益、利用、主体、経済、現代、結果、環境、危険、機会、言葉、議論、否定、機能、事実、時間、自然、認識、一部

話題頻度 6: 意識、著者、選択、主張、課題、効果、集団、我々、理解、国家、国際、特徴、表現、本質、日常、本人、様々、交流、自体、努力、不可

話題頻度 5: 活動、参加、指導、相手、家庭、国民、人生、対立、解決、公共、共生、自立、責任、比較、家族、変化、完全、原則、側面、批判、一般、外部、近年、形成、中心、理由、論理、過程、共有、教師、傾向、検証、原理、今日、時代、尊重、立場、思考、自覚、十分、将来、負担、考慮、行政、最後、着目、同士、不安、安全、維持、以外、依存、安心

次に、上記 138 の中から選定した思考・判断語句 12 語、論証語句 7 語とその頻度等を表 11 に示す。なお、表 11 では二重線より上に思考・判断語句を、下に論証語句を示している。また、コーパス名の横の数値は文章数である。

表 11 <解答例>から抽出した思考・判断語句と論証語句の各コーパスにおける頻度等

語	解答例 (51)		大学生 (98)		高校生 (51)	
	頻度	話題頻度	頻度	使用者率 (%)	頻度	使用者率 (%)
場合	18	11	37	30.61	7	9.8
判断	22	8	27	15.31	14	11.76
認識	9	7	7	5.1	6	9.8
選択	19	6	5	2.04	6	9.8
理解	14	6	22	18.37	16	17.65

対立	14	5	1	1.02	4	3.92
側面	9	5	2	1.02		
理由	8	5	120	63.27	31	35.29
傾向	7	5	8	7.14	1	1.96
思考	6	5			1	1.96
考慮	5	5	2	2.04	2	3.92
着目	5	5	2	2.04		
結果	16	7	9	8.16	15	21.57
議論	12	7	4	2.04		
否定	12	7	9	7.14		
主張	19	6	38	18.37	2	3.92
比較	11	5	5	5.1	9	9.8
批判	9	5	4	2.04	1	1.96
検証	7	5				

表 11 と表 10 を見ると、解説の思考・判断語句、論証語句のうち、〈解答例〉でテーマをまたいで一定数以上使用されているのは「検証」だけであることがわかる（「根拠」は話題頻度 2）。この点は、テーマが異なる点などを考慮する必要はあるが、論証語句では「論証に必要な概念」と「論証に必要な語句」が一致しない場合が、少なくとも意見を述べる文章においては、あることを示すものとして解釈される。

また、表 10 の 19 語のうち、1 人以上の使用が見られる語（大学生 17：高校生 14）、使用者率 10% 以上の語（大学生 5：高校生 4）のいずれにおいても〈大学生〉の方が〈高校生〉よりも使用語の種類が多いが、〈大学生〉〈高校生〉ともに多くの語が使われているとは言い難い。こちらについては、習熟した論理的な文章を「書く」ためには、継続的な語彙指導が必要であることを示していると捉えることができる。

以上、本節では、〈解答例〉〈大学生〉〈高校生〉の 3 つのコーパスから、漢字二字から成る「論証に必要な語句」を抽出した。3.2 2 で取り上げた「意味 - 意味する」の扱いや他の語種の語の抽出方法など課題も多いが、論理的な文章を支える語の抽出作業における上記方法の有効性を示すことはできたと考える。

4. まとめと今後の課題

本稿では高校生、大学生の意見を述べる文章を対象として、1) 文末表現、2) 文末以外の語彙、3) 「論証に必要な語句」に着目して分析を行った。いずれにおいても高校生、大学生の語彙が不足していることを指摘することができた。その中で 1)、2) においては選択する語句と段落関係における吟味の浅さや類似する他のバリエーションの豊富さに欠けるという点で洗練度の低さを指摘した。3) では論理的な文章を書くための語彙を抽出するにあたってその作業方法の妥当性を示した。これらによって今後の語彙指導の方向性や語彙リスト作成の有効性を示すことができた。

本稿で扱った分析観点 1)、2) に現れる言語事例はいずれも文法的な誤りとは言えず、「適切さ」、つまり語彙の質に関わるものである。しかし、これまでの作文支援において「適切さ」の指標は未だ構築されていない状況にあると思われる^(注15)。本研究を進めることによって、相手や文体に応じた適切な文章を作成するための指標が蓄積され、文章の習熟度をはかる手立てが構築されていくことと期待される。また、従来、高校生が手にす

る語彙リストの多くは「読む」ためのものであったと言えるなか、本稿の分析観点3)における調査を進めることによって「書く」ための語彙リストが抽出されるとともに、高校生、大学生における理解語彙と使用語彙の実態も明らかになっていくことと考えられる。語彙指導における、質と量の両面の充実を目指して調査考察を進めていきたい。

本稿では論理的な文章のなかでも、意見を述べる文章を対象としたが、今後は説明文、論説文、解説文、評論文、批評文等との比較を行いながら、各文章の文体的な特徴を精査していく必要がある。それらに関連して、本稿では文末表現「ノダ。」「ダロウ。」については細やかな考察を得ることができなかった。上記の課題に併せて分析を深めていきたい。

【注】

- 注1 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」（平成28年12月21日）
- 注2 高等学校学習指導要領解説国語編、p.13
- 注3 高等学校学習指導要領解説国語編、pp.11～12
- 注4 〔知識及び技能〕(1) (イ)
- 注5 例えば、山下（2011、p35）では文法的には誤りがない表現形式について、接続表現を例に「より適切な表現形式の選択が十分に行われていると言いがたい」とし、「学習者の表現形式を吟味する態度が習得されていない」と指摘する。
- 注6 高等学校学習指導要領解説国語編、p.98「論理的な文章とは、現代の社会生活に必要とされる、説明文、論説文や解説文、評論文、意見文や批評文などのことである。」による。
- 注7 高等学校学習指導要領解説国語編、p.149
- 注8 茨城県内にある私立高校特進クラスに所属する2年生。2018年3月、7月実施。
- 注9 国立大学教育学部1年次に所属する学生。2013年、10月実施。
- 注10 国立大学19題、私立大学11題の30テーマについて3社（教学社、代々木ライブラリー、駿台文庫）の作成によるものを使用した。解答の字数は600字以上1000字程度とし、出題内容は課題型がほとんどであるが、収集したテキストは課題文の要約を含まず、「あなたの考えを述べよ」と設定されたものを選んだ。
- 注11 文末句点位置から10字程度を抽出し、最も外側に位置する表現形式とする。例えば「思うのだ」は「ノダ」の用例としてカウントしている。また、文体差一例えば常体と敬体、「だ」と「である」、「ないだろう」と「なかろう」、「言える」と「いえる」等一は全て同じ用例としてカウントしている。
- 注12 段落を形成していないものは除外している。
- 注13 森山（1992）によれば「と思う」は「個人的見解の表示」とされる。また宮崎（1999）では「と思う」を「先んじて心中に存在する思考をモニターして述べる」とする。本稿は、意見を述べる文章において「思う」を用いることが不適切であることを主張するものではなく、個人的見解をどの段落でどのように表示するかということや他の語句への言い換えが可能か否かの吟味が必要であることを指摘しようとするものである。森山（1995、p.176）では公的に情報が発信される場合は「と思う」の使用が不適切であり、その場合、受身形にすると一般化されることになり問題はないとする。意見を述べる文章において「公的」の程度をどのように定めるかについては学齢や他の文体的特徴を見据えながら考察を行いたい。
- 注14 なお、新指導要領では「情報の扱い方に関する事項」が新設され、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが示されている（高等学校学習指導要領解説国語編、p.12。）高等学校ではこの指導内容を「現代の国語」、「論理国語」で具現化する。その際、接続表現（同、p.77）だけではなく、本稿で扱った文末表現についても吟味していく必要がある。
- 注15 島田（2012、p.115）、渡辺・島田（2017、p.169）、酒井・関（2020）では従来のアカデミックライティングの指導が形式面に重きが置かれていたことを指摘している。

【引用文献】

- 沖森卓也 (2016) 『文の論理は接続語で決まる 文章が変わる接続語の使い方』、ベレ出版
- 川端元子 (2013) 「大学生のレポートに出現する『思う』と『考える』の機能について — 伝達の側面から見た問題点」『愛知工業大学研究報告』48、pp.77-84、愛知工業大学
- 酒井晴香・関玲 (2020) 「文末モダリティ表現に焦点を当てた大学生レポートの問題 — コーパスを用いた実態調査より」『国語科教育』88、pp.21-29、全国大学国語教育学会
- 島田康行 (2012) 『「書ける」大学生に育てる — AO入試現場からの提言』、大修館書店
- 松崎史周 (2018) 「国語科教育における「思考」「論理」に関わる語彙の指導 — 論理的文章を書くことの学習指導と関連させて」『日本女子体育大学紀要』48、pp.153-162、日本女子体育大学
- 宮崎和人 (1999) 「モダリティ論から見た『～と思う』」『待兼山論叢 日本学篇』33、pp.1-16、大阪大学大学院文学研究科
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって — 文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11-10、pp.105-116、明治書院
- 森山卓郎 (1995) 「ト思う、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～Ø — 不確かだが高い確信があることの表現」『日本語類義表現の文法 (上)』pp.171-182、くろしお出版
- 山下直 (2011) 「接続の表現形式の選択に対する学習者の意識 — 言語運用力の向上につながる文法学習に向けて」『人文科教育研究』38、pp.25-36、人文科教育学会
- 渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの高大接続 — 高校・大学で「書くこと」を教える人たちに』、ひつじ書房

【付記】

本研究は科学研究費基盤研究(C)「言語分析力を育成し国語文法力向上に寄与する国語データ駆動型学習教材開発の研究(19K02700)」、基盤研究(C)「日本語複文と文連鎖に関する意味論・語用論的研究(20K00596)」の成果の一部を含む。

本稿は第140回全国大学国語教育学会春期大会(2021年5月29日オンライン開催)での発表を骨子として、席上で有益なコメントをいただいた諸先生に記して感謝を申し上げます。